

【我慢（がまん）】

我慢は、辛抱をすること、堪え忍ぶことを指し、よい意味に用いられています。

この我慢は、仏教語なのですが、あまり良い意味ではないのです。自分の中心に我（が）があるとの考えから、我をたのんで自らを高くし、他をあたるとして説明しています。

仏教では、そのようなおごりたかぶる心を七つ挙げ、七慢と称しています。我慢もその一つです。その後も、我意を張るさま、強情、高慢という具合に、好ましくない意味のものばかりなのです。



本堂前の手水鉢 善教寺「石」シリーズ その1

それが、我が強い、負けん気が強い、がんばる、辛抱するなど変化したらしいのですが、それにしても、あまり良くない意味の語が、よい意味の語に変化していったのは面白いものです。

【歡喜（かんき）】

普通、「歡喜」はカンキと読み、大變喜ぶことを意味しますが、仏教語としてはカンギと読み、宗教的な満足、全身心をあげて喜ぶことを意味します。仏典には、仏の教えや仏の名号を聞いて、歡喜踊躍すること、よく説かれていきます。

信心歡喜といえ、本願を信じて喜ぶことを表します。空也や一遍などは、その喜びを踊りに表しました。菩薩の歡喜地、歡喜光、歡喜会など、歡喜のつく仏教語は数多くあります。

親鸞聖人は「歡は身をよろこばせ、喜は心をよろこばせることで、歡喜は、往生が確かに得られると信知して、結果を得る前から、あらかじめ喜ぶ心」であると、『一念多念証文』の中で説かれています。（辻本敬順氏「仏教用語豆辞典」参照）

住職レター

善教寺には、多くの「石」があります。そのどれもが、普通の庭先にあるサイズではなく、巨大なサイズの「石」ばかり。広い境内ゆえ、小さな「石」だと目立たないので、

自然と大きな「石」を置いていったのでしよう。

私が小さい頃は、この「石」の上で遊ぶのが楽しかったものです。先日、「石」の上に登ってみました。やはり、目線が高いのは気持ち良いのですが、子供の頃には、もつと高く感じたような…。

さて左上の写真は、本堂前にある手水鉢。ご参拝された方々や、講師で来られたお寺様から、「形も良く、立派な手水鉢ですね」と、お褒めの言葉を頂戴します。本来は、お水を引いて、手洗い場として使うのでしようが、置石のごとく本堂前で鎮座しております。いつから、この場所にあるのでしょうか…。

ご存知の方は、教えて下さいね。おそらく、二百年〜三百年…。もしかしたら、開基された五百年前から、この場所に置いてあるのかも…。

これから何年、何十年、何百年と、「石」は同じ場所に鎮座して、我々を見守ってくれるのでしようね。

今度、「石」の上に登ったら、「ありがとう」と、声を掛けてみます。

